

部活動における社会的スキル獲得についての一考察

A Study on Social Skill Acquisition in Club Activity

田向 優
Yu Tamukai

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード : 部活動, 社会的スキル, コミュニケーション
Key words : Extracurricular activities, Social Skill, Communication

1. 研究目的

1. 社会化

社会化(Socialization)とは、「社会的・集団的生活の中で役割を獲得し、文化を内面化すること」である(腰越, 2014)。社会化はさまざまなルートを通して行われるが、学校での社会化はその重要なルートの一つである。アバークロンビーらは、社会化が3つの段階に区別できること(幼児の社会化, 学校での社会化, 大人の社会化)を紹介している(森, 2017)。また、社会化には、①「社会がどのようにして個人をそのメンバーに作り上げていくか」という社会全体の動向を重視する側面と、②「どのようにしてその社会を支えるメンバーになっていくか」という個々の社会成員の主体性を重視する2つの側面がある。

ところで、現代日本では、学校での社会化が大きく変化しているという指摘がある。例えば、教師が提示した学校で生活をする上での規範や指示を守ることで児童の社会化が行われていた時代から、教師が提示した学校で生活をする上での規範や指示を守ることで社会化していくのではなく、子ども同士が提示した規範を守り、内面化することで社会化する時代へ変化しているという。上述した社会化の2つの側面の内、②について、腰越(2014)は、現代の学校で起こる社会化は『「学校では教師が社会化するのではなく、子どもが自ら社会化する」といった感覚が、子どもたちの内面に潜み、もはや消しがたいほどにその気持ちが盤踞している(中略)第2次社会化の舞台たる学校においても大人=社会化の主体、子ども=社会化の客体、という前提が崩れてきている可能性を想定すべきなのではあるまいか』と述べている。

この指摘に添うなら、学校での社会化の内、学校生活の中でもクラスでの体験や部活動体験が大きな位置を占めると考えられる。中でも部活動では、生徒—教師関係だけでなく、先輩—後輩関係や同級生同士との関係など、授業等の活動よりも生徒同士での多様な人間関係が築かれる。したがって、部活動では、生徒同士での規範が作られやすく、生徒が主体となった社会化が起りやすい環境であることが考えられる。

本研究では部活動体験における生徒の社会化について取り上げたい。その際、心理学的観点から社会的スキルに注目して、どのような社会的スキルがどのように生徒に取り入れられていくか、それは大人が身に付けさせたい社会的スキルとどのように共通し相違するのかなどが問題となる。社会的スキルとは「われわれが他者との関係を円滑に進めていくための総合的能力を表す概念」である(大坊, 2006)。筆者は、世代間で伝達される社会的スキル以上に、生徒たちが現在、将来にわたり関わりを持つ先輩、同輩関係の中で彼らの間で通用する社会的スキルに関心がある。同世代が主に運営に関わっている部活動の中では、生徒自身が規範を作り、それに他の生徒が従うことで社会化がなされ、結果、社会的スキルが獲得されていると考えられる。従って、本研究では、部活動体験を通して獲得される社会的スキルとは具体的にどのようなものであるかを検討したい。

2. 部活動

部活動とは、学習指導要領(2009)によると「スポーツや文化及び科学等に親しませ、学習意欲の向上や責任感、連帯感の涵養等に資するものであり、学校教育の一環として、教育課程との関連が図ら

れるよう留意すること。その際、地域や学校の実態に応じ、地域の人々の協力、社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携などの運営上の工夫を行うようにすること。」と定められている。ベネッセ教育総合研究所(2014)は、部活動の加入率について中学生は9割、高校生は6,7割であり、活動時間も中学生は約100分、高校生が約120分であることを明らかにしている。したがって、学生の大多数が部活動を経験しており、放課後の時間を部活動に費やしていたと言える。

大学生を対象とした研究から、学生は部活動体験を通して様々なものを得ている。回顧調査により、大学生が中学校の運動部活動体験を通してライフスキルにどのような影響を受けたかを調査した青木・杉森・下川・熊谷(2011)は、好ましいやり方で人と接触することができる力を指す「対人関係スキル」獲得に強い影響を与えたと示唆した。また、栗田(2014)は、中・高時代に運動部活動体験を経た大学生が部活動非経験者と比べて心理的対処能力スキル(ストレスコーピングスキル)が高いことを明らかにした。つまり、部活動の経験を通して、学生はライフスキルやストレスコーピングスキルなどを獲得していると考えられる。

3. 生徒に獲得される社会的スキル

部活動の中では、例えば先輩—後輩関係や同級生同士との関係、生徒—教師関係など様々な対人関係が育まれる。これらの対人関係を円滑に築くためには、他者の行動や言動を読み取り、自分と相手とが不快にならないような行動をとる社会的スキルが必要である。

大坊(1998)は社会的スキルの構成要因として、以下の7つを挙げている。

1. 対人コミュニケーション(記号化、解読)
2. 察知・推測(メタ・コミュニケーション)
3. 対人認知・状況理解
4. 自己表現(開示・提示)の仕方
5. 対人関係の調整(コントロール)
6. 社会そして組織にある文化規範・規則
7. 個人属性

本研究では、上記の社会的スキルの構成要因の内、対人コミュニケーションと対人認知を取り上げ、部活動体験を通してこの2つの社会的スキルがどのように獲得されるかを検討したい。対人コミュニケーションとは人と人とのコミュニケーションであり、情報やメッセージの伝達およびその解読

の過程を総称したものをいう(大坊・奥田(編), 1996)。ちなみに、新聞、ラジオ、テレビ等の不特定多数の受け手に送られるマスメッセージとは区別される(大坊・奥田(編), 1996)。対人認知とは、人間に関したさまざまな情報を手がかりにして、性格・能力・情動・意図・態度といった人の内面にひそむ特性や心理過程を推論する働きを指す(林, 1999)。

部活動の研究では運動部活動体験がスキル獲得につながるものも多く、文化部活動体験について検討した研究はあまりみられないが、関(2017)は部活動を運動部/文化部と対立項に分類するのではなく、部活動の理念や経営(部員数・勝利至上主義など)に注視するべきであると言う。そこで、本研究でも、部活動の理念や経営に着目した部活動体験の検討を行うことで、部活動体験が学生にどのような影響を及ぼすのか詳細に検討できると考えた。

従って、本研究では、部活動を形態(活動の頻度、理念、部員数)で分類し、過去の部活動体験がどのような体験であったか、またどのような部活動体験を通して生徒達の伝達される社会的スキル(特に、対人コミュニケーションにおける記号化、解読の特徴および対人認知で重視される事柄)がどのようなものであり、どのように獲得されるか、さらには大人世代が想定する社会的スキルとの違いを明らかにしたい。

2. 研究実施内容

調査対象者 部活動を経験した大学生を対象にしたいと考える。

調査方法

質問紙調査 大人世代が考える社会的スキルと子供世代が考える社会的スキルがどのように異なるのかを調査したいと考える。また社会的スキル尺度を用いて、調査対象者が実際に社会的スキルを獲得しているかを検討したいと考える。

面接調査 部活動体験が調査協力者にとってどのような体験であったか、調査協力者と部員(先輩、同輩、後輩、教師等)との関係性について、調査協力者が部活動を通してどのような社会的スキルを獲得したと感じたかということ半構造化面接で調査したいと考える。

3. まとめと今後の課題

今回研究テーマに関する知見を深め、検討する上での方針を定めることができた。

今後の課題として、4月までに本研究を倫理調査委員会に提出する。その後、第一研究を行うことを目標とする。

付記

本研究は、大妻女子大学人間生活文化研究所平成29年度大学院生研究助成(B)(課題番号 DB2923)「中学生の部活動におけるバーンアウトの構造の検討」より研究助成を受け行った。

主要参考文献

- [1] 大坊郁夫(1998). しぐさのコミュニケーション—人は親しみをどう伝えあうか— サイエンス社.
- [2] 大坊郁夫(2006). コミュニケーション・スキルの重要性 日本労働研究雑誌, 13-22.

[3] 平野朝久(監)腰越滋(2014). 『教育入門のための教育学』 第7章 これからの学校(2) 子どもの社会化論の観点から 共同出版 129-150.

[4] ベネッセ教育総合研究所(2013). 「第2回放課後の生活時間調査」子どもたちの時間の使い方 [意識と実態] 速報版

[5] 文部科学省(2009). 学習指導要領「生きる力」第1章 総則

www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/sou.htm (平成21年以前)

[6] 関朋昭(2017). なぜ吹奏楽部は文化部なのか—運動部と文化部のダイコトミーに着目して— 紀要= Bulletin of Nayoro City University, 11, 7-16.

4. この助成による発表論文等

特になし